

勝林寺寺報

本師曇鸞梁天子

常向彌処菩薩礼

三藏流支授淨教

焚燒仙經傳案報

今年に入ってもう六ヶ月、一年の半分が終わってしまいました。三とか六とか区切りになる数は、折り返し、変わり目が来るような気がします。朝犬と散歩するようになって、一日ではさほどわからないのですが、今日までは日の出が早くなり、夏至を頂点にしてまた少しづつ短くなっていく陽の光は、一年の折り返し点が来ていることを私に知らせてくれ、ポーっとしながら新しい時代への心構えのようなものを迫っているようです。

仏教の長い歴史の中で、インドでお釈迦様が説かれた仏教が、遠く言葉も違う異国の地へ入っていくところの転換点は、さぞ大きかっただろうと思います。親鸞さまは正信偈の中で、浄土の教えをインドから中国へ橋渡しされた曇鸞大師を「本師」と呼ばれ、自分にとってお釈迦様に並ぶ本物の導師として、ほかの七高僧とはまた特別に思われていたようです。この「本師」の尊称は親鸞聖人の面授の師である法然上人にも使われています。もちろん法然上人は親鸞さまにとって、浄土へと歩む道を直接導いていただいた先生ですから、「本師」そのものなのです。が、多くの高僧様の中で、時を隔て遠い国の曇鸞大師を「本師」と呼ばれるには親鸞様なりの深い思いがあったのだと思います。

曇鸞大師はすぐれた学僧としてその名声は中国の北方はもとより、南方にも広く響きわたっていたのでした。大師は中国の人びとに仏教の

大切な教えを正しく伝えなければならぬという使命を強く感じられ、お経の註釈の作成に取りかかっていた。ところが、あまりにも厳しく精を出して研究に打ち込まれたためか、病にかかられ、註釈の仕事が中断せざるを得なくなりました。そこで、広大な仏法をきわめ、註釈を完成させるには、健康な心身と長寿を得なければならぬと痛感され、まず神仙の術を学ぼうと決められ、長生不老の術を学ばれたのでした。やがて大師は、長生不老の術を説いてある道教の経典を授けられ、喜び勇んで家へ向かわれました。その途中、都の洛陽に立ち寄られた曇鸞大師は、三藏法師の菩提流支にお会いになり、そして、誇らしげに、自分は長生不老の術を学んできたばかりであること

を告げられたのです。すると、菩提流支三藏は、地に唾を吐き捨てて「何という愚かなことだ」とばかりに、叱りつけたのです。そして、『観無量寿経』を授けて、阿弥陀仏と「無量寿」（長さに量りのないのち）について教えたのでした。曇鸞大師は、この教えに触れられて、不老長寿などというものは、愚かな欲望に過ぎないことに気づかれ、「こんなものがあるから、人は愚かな迷いを繰り返すのだ」とばかりに、大切にしておられた仙經を焼き捨ててしまわれたのです。私たちの社会はいま大きな転換期を迎えています。医療・化学は益々進歩し、不老長寿を可能にする神仙の術を既に獲得しているようです。そんな今だからこそ本師曇鸞に学び、仙經を捨て、今の時代の中で念仏者として真実に生きる姿を社会に示していかなければならないのです。

(文責 住職)



ご報告

今年も無事に納骨研修旅行に行っていました。傘を開くこともなく、参加者全員お元気で、和気あいあいとほっこりとした二日間を過ごさせていただきました。その中で遭遇した「三つのご縁」を紹介して、ご報告に代えます。

その①

トイレ休憩でたちよった「味夢の里」のこと。「バスは氷上観光ですよ、間違って違うバスに乗らないでね」とガイドさんに念を押され、用を足して戻つてくると、なんとそこに二台の氷上観光のバスが並んでいます。「あれ、ナンバ―までは覚えてないけど、どっちかな」とバスの前に掲げたプレートをのぞき込むと「徳林寺」と書いてある。「えーっ!」そう、隣同士で同じ氷上観光の「勝林寺」と「徳林寺」のバスが並んでたんです。一字違いの偶然にどちらの乗客もびっくりでした。(ちなみに徳林寺は和田山の妙心寺派のお寺さんでした)

その②

「まーガイドさん!」「まー先生!」本山のトイレの入り口で黄色い声が上がりました。聞けば、うちのガイドさんと、お父様の納骨にお参りになった亀井さんのお嬢さん、つい先日の修学旅行でもご一緒だったそうです。しかもそれがとてもいいご縁だったそうで、感動の再会となったわけです。

その③

本山の御影堂に入った私の手をいきなりとって「みゆきさーん」と迎えてくれる人がいます。びっくりしてよくよく見てみると、滋賀の順光寺(前坊守の弟さんのお寺)坊守愛美子さん。二年前の旅行でもお世話になりました。なかなか会うことが出来ないのに、まさかここで会えるとは!ちよつと時間がずれていたらかなうことのない縁に感謝感謝でした。

七月 勝林寺 予定

一日(月)	坪木 勉宅 二五回忌
五日(金)	防災対応向上研修(市民会館)
六日(土)	藤田正吾宅 三三回忌
	お磨き 清掃奉仕
七日(日)	永井あさ江宅 七回忌
八日(月)	県仏教会理事総会
	勝林寺 永代経
九日(火)	勝林寺 永代経
一四日(日)	立脇 晃宅 三回忌
一五日(月)	出石組仏壮報告総会(西宗寺)
一七日(水)	兵庫教区 教区会
二〇日(土)	出石組 同朋講座
二六日(金)	みのりを聞く会
二八日(日)	出石組 連研 (勝林寺)

(敬称略)



永代経のご案内

七月八日(月) 午後七時三十分より

七月九日(火) 午前一〇時より

ご講師 長尊寺ご住職

玉岡 祐教師

人間について

仏教では、人間のことをサツトバといいますが、サツトバとは、感情を持つものということ、で「有情」と訳されます。木や石には感情がないので「非情」といいます。この有情とは、あらゆる生きものを意味するところ、また「衆生」とも訳されます。その点、仏教では、人間とは動物と同じで何の差違もないと考えます。ただ仏教で人間が動物だというのは、人間とはサルが進化したもので、もとは尻尾を持っていたという、そういう形体からいうのではなく、人間はどんな偉い人でも、その心の底には、恐ろしい自己中心の心、我欲を宿して、それは猫や犬とも変わらないということから、人間は有情、動物だというわけです。

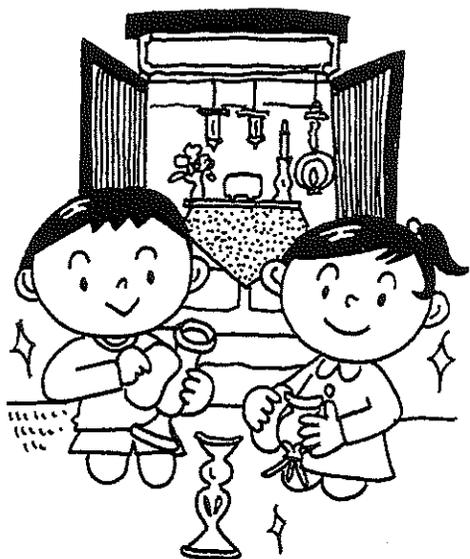
しかしまた仏教では、人間のことをマヌーシヤともいいます。マヌーシヤとは、考えるものということですが、それはたんに知恵を持つということではなくて、内に向かつて考える、自己について反省、慚愧することを意味します。その点、一般には「人間」と訳されますが、また「有情」に対していえば「有覚」と訳してもよからうと思います。『大般涅槃經』に、「慚愧あるものを人と云い、慚愧なきものは人となさず、名付けて畜生となす」と説かれています。自分の行為を省みて、恥ずかしいと思わないものは人間ではない、畜生だというわけです。

もともと仏教徒は「有情」、動物としての私が、教え学ぶことを通して、「有覚」、まことの人間に成っていくことをめざすものです。私たちは誰しも縁あって、地獄の底からこの人間の世界に生まれたものです。だからみんな心の底には地獄の生命を宿しているのです。そこで人間らしく生きるためには、自分の歩むべき道を、しっかりと学ばなければならないのです。現実の

ありのままなる私が、理想のあるべき私に向かつて成っていくこと、そういう人間成熟の道を進めるものが仏教です。夫と妻と、父と母と、いい妻といい、どれだけ確かに、いい夫になり、いい妻となつていっているのか。どれほど立派な父となり、立派な母となつていっているのか。その成つていない私が、少しでもよく成つていくことをめざすものが仏教です。

教えを学ぶとは、あたかも鏡を見るようなものです。鏡を見ながら自分の姿を正すように、教えを学ぶと自分の欠点、未熟さが知られてきます。そこで私たちは教えを学びつつ、自分を反省し、慚愧しながら生きていくことが大切です。仏教が「有情」から「有覚」へと教える意味がここにあるわけです。

親鸞さまは、念仏を申して生きるならば、誰でも「仏になるべき身に成る」と教えられています。やがては仏になる身に、今ここで成れるというわけです。私たちは、それぞれが教えを学びつつ、少しでもよりよい夫と成り、妻と成り、またよりよい父と成り、母と成つていきたいものです。(信楽峻磨遺稿法語集より引用)



法語カレンダー七月

浄土真宗のならいは

念仏往生ともうすかり

車を運転していると、信号に引つかかって、停車しなければならぬ時があります。もちろん交通ルールを厳守するのは当たり前です。でも、前の車までは青信号で、自分の時に赤信号に変わったりますと、なんだか負けたような気がするので、(決して勝負しているわけではありませんが・・)

私の人生にも、思いがけずストップがかかることがあります。体調が悪くなって寝込んだとき、ケガをして入院した時、家族の死別に涙した時、小さきままですが、日常の毎日の生活を今まで通りに送れなくなり、そのたびに「あーあ」とため息をついたり、深く思い煩ったりします。

これからの人生にも、思いもよらないストップがかかることがあるのでしようね。その最も大きなことが、私の人生を完全にストップさせられる「私のいのちの終わり」の赤信号でしょう。そのときに「なんで私が・・」とどうして・・と悔しい思いをして「負けた!」とおもうしかないのでしょうか。死は必然でありながら、自分の死としては未経験なことです。未経験なことがやってくると思うと、いろいろな不安がつきまといまいます。

阿弥陀さまは、この私をお浄土に往生生まれさせ、この上ないさとりを開かせ、仏にさせるお誓いされました。「南無阿弥陀仏」一つのお救いを聞き喜ぶ私たちは、お浄土に往生生まれていくのちとなりました。死んで負けて終わるとしか思えなかったいのちから「死ぬ」のではないう浄土に往生「生まれ」ていくいのちとならせていただいたのです。(心に響くことば)

どすん

今年も「永代経」の時期と成りました。出石の町内の寺院の中では、早いお寺は五月からお勤めになりますので、七月の八・九日にお勤めする勝林寺はたいがい一番最後です。年によつては、大変暑い時期と成り、外陣以上には暑い内陣出勤を終えられたご住職の額からは、滝のように汗が流れるといった年も過去にはありました。今年はその日にならなければいいかと今から案じております。

さて、ご門徒の皆さんの記憶にもまだ残っていることですが、以前は、永代経の二日目の午前中には仏婦の総会も開催しておりました。前坊守の時から長年にわたつて続けていた、「そのまま引き継ぐことが私の務め」と思い、私なりに頑張つて続けておりました。しかし、そのころ学校勤めをしていた私にとつて、七月のこの時期は学期末に入り、てんてこ舞いの日々でした。それに仏婦の総会と永代経が重なれば・・(ご想像にお任せします)首にかけて輪袈裟が、汗でいつもぐしょぐしょになっていました。きつと、終始余裕のない怖い顔でお勤めしていたのではないかと思います。阿弥陀さんもいい迷惑です(笑)で、二十年近く続けてようやく「これはあかん」と時期の変更に踏み切りました。現在は、春の彼岸会の午前中に開催しています。暑くも寒くもなく心地よい気候と、祝日という安心感の中で、終始笑顔でお勤めできるようにになりました。

こうして読み進めていただくと「もつと早く変えたらよかったのに」と思われたでしょうね。その通りです。ですが、それが出来ませんでした。「守る」ことに精一杯でした。思えば、どんな些細な事でも「変える」ことには、それなりの覚悟と勇気がいられます。それによつて起こるすべてを受け止めないといけないから。こう見えて結構小心者の坊守です(笑)(文責 坊守)